

論 文

ふれあい恐怖心性者の自我同一性の様相に関する一事例検討

黒木 拓心*・北田 朋子**

要 約

本稿では、現代青年が他者との関係性を困難に感じる要因の一つとなる「ふれあい恐怖心性」を持つ者が抱える、一部自我同一性の不安定さについて、その要因を調査するため、オンライン通話を用いた半構造化面接を1名に実施した。

調査の結果、日常生活では自分や性格、意見などを場面ごとで他者に合わせて変化させている事が、「自分がない」感覚に繋がり自己斉一性・連続性が低くなっていることが、また、他者との関りにおいて本当の自分は表出されず、「わかってもらおうという気もない」ため「自分が表出していないのだから他者もわかってくれないだろう」という感覚に繋がり、対他的同一性が低くなっていることなどが示唆された。

キー・ワード：ふれあい恐怖心性、自我同一性、一事例検討

目 的

ふれあい恐怖とは

近年、現代青年が対人関係を避ける要因の一つとして、ふれあい恐怖があげられている(岡田, 1993, 2002)。

ふれあい恐怖とは、他者との関わりへの困難を感じ、その結果対人関係を避けようとする傾向の事である。一般的に対人関係全般が困難というものではなく、初対面での関係性のような表層的な人間関係の場面では問題なく人間関係をこなせるが、関係が進展し親密な関係となる場面に困難を感じるとされる。そのため、関係性が深まる場面である会食や雑談場面が困難の中核としてあげられる(岡田, 2002)。また、内省傾向が低く、自分自身の内面的不安を感じる傾向が低いことや、他者の視線からあらかじめ退却した場所で安定していることなどが特

徴として挙げられる(岡田, 1997, 2002)。

こうしたふれあい恐怖の傾向は病的ではない健康的な一般青年にも見られ、岡田(1997, 2002)はこの一般現代青年が持つふれあい恐怖傾向の事をふれあい恐怖心性と定義した。

対人恐怖との違い

ふれあい恐怖と同じように対人関係を避けるものとして対人恐怖がある。対人恐怖とは、特定の対人場面で極端に強い不安や緊張を感じ、その結果対人関係を避ける性質の事である。この性質が生活に支障をきたすなどといった病的なもの(神経症レベル)になると対人恐怖症となる。ふれあい恐怖は対人恐怖の亜形であるとされ、それぞれ対人関係を避けるという特徴を持つが、両者には違いがある。

相違点としては主に3点あげられる。(岡田, 2002)

第1に、対人関係を困難に感じる場面の違い

*東亜大学大学院 総合学術研究科

**東亜大学 人間科学部

があげられる。対人恐怖では人と人とは知らない人として出会い、顔見知りになる場面に困難を感じる。それに対してふれあい恐怖の場合は、人と人とは顔見知りになり、情緒を伴うような親密な関係に発展する場面において困難を感じる。そのため、ふれあい恐怖心性者の友人関係は情緒的な深まりを欠いた関係にとどまりやすく、情緒的な交流が発生しやすい会食場面や雑談場面に困難を感じるとされる。

第2に、身体症状の違いである。対人恐怖の場合は赤面恐怖や視線恐怖、自己臭恐怖などの身体症状が現れる場合がある。しかし、ふれあい恐怖では身体症状が出ることはあまりないとされている。

第3に発症年齢の違いである。対人恐怖は中学生から高校生にかけて多く発症するのに対し、ふれあい恐怖は大学生の年代に多く発症するとされる。

ふれあい恐怖心性者の自我同一性の特徴

ところで、ふれあい恐怖心性者の自我同一性について伊藤他(2008)は研究協力者をふれあい恐怖心性者群、対人恐怖心性者群、どちらの恐怖も持たない群(以下良好群と呼称)の3群に分け、それぞれの群を抑うつと自我同一性の感覚の観点から質問紙調査を用いた検討を行った。

自我同一性とはEriksonによって提唱された自己に対する感覚における理論のことで、Eriksonは自分が他者と代替不可能な独自の存在であるという感覚(斉一性)、過去から現在まで一貫した同一な存在であるという感覚(一貫性)、何らかの社会集団に所属し、その集団に受け入れられているという感覚(帰属性)の3点によって自我同一性を定義している。

結果、ふれあい恐怖心性群の自我同一性の感覚は対人恐怖心性群より全ての項目において高いが、良好群と比較すると一部の自我同一性が低いことが示唆された。

伊藤(2008)では自我同一性の感覚を測定する尺度としてMEIS(谷, 2001)が使用されており、自我同一性の感覚を自己斉一性・連続性

(自分は自分であるという一貫性と時間的な連続性の感覚)、対他的同一性(他者からみられている自分が本来の自分自身と一致している感覚)、対自的同一性(自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚)、心理社会的同一性(現実の社会の中で自分自身を意味付けられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚)の4項目で測定した。

このうち、ふれあい恐怖心性者は良好群と比較して、自己斉一性・連続性及び対他的同一性が良好群より低いということが示唆された。

本研究の目的と意義

これまでの先行研究によって、ふれあい心性者の一部の自我同一性の感覚が良好群と比較すると低いことが確認されている。しかし、この一部の自我同一性の感覚が低い要因については検討されていない。これは先行研究で行われた検討は量的な側面から行われた検討であり、ふれあい恐怖心性者が持つ内的な情報を検討することに限界もあったためであると考えられる。

そのため本研究では、先行研究で判明したふれあい恐怖心性者の自己斉一性・連続性及び対他的同一性の自我同一性の感覚の低さの原因について半構造化面接を用いて質的な側面から検討することを目的とする。

伊藤他(2008)は、ふれあい恐怖心性者の一部不安定な自我同一性による自我同一性の危機が対人場面での問題を引き起こしている可能性について触れ、自我同一性に焦点を当てた支援が有効ではないかと指摘した。

本研究を行うことで、一部自我同一性の感覚の低さの要因が判明しふれあい恐怖心性者の自我同一性に焦点を当てた支援を検討できるようになると考える。

方 法

研究協力者の属性

大学に所属する20歳男性1名に、インタビューを実施した。この研究協力者は研究者の

友人である。この研究協力者はあらかじめ「ふれあい恐怖尺度」(岡田, 2002)に回答済みであり、ふれあい恐怖心性が高いことが分かっている。

調査手続き

インタビュー手続き

インタビューは Discord 社インターネット通話ソフトを使用し、研究協力者と顔などを介さない声のみの通話形式で行った。インタビュアーは、語り手の自由な語りを促進するように努めた。インタビューは半構造化面接で行い、あらかじめ以下の4つの質問を設定して行った。

- (1) あなたは自分がないと感じることはありますか。
- (2) あなたの本当の自分というものについて感じたことを教えてください。
- (3) 自分の周りの人々は本当の私を分かってくれていないと感じることはありますか。
- (4) 人前での自分は本当の自分ではないような気がする、これについてどう思いますか。

ふれあい恐怖心性者は「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」が低いことが分かっており、それを調査する質問として自己斉一性・連続性については1、2の質問、対他的同一性については、3、4の質問を設定した。

このインタビューは、対人関係や自身の感情について深く聞く質問であることや、ふれあい恐怖心性者は情緒的な会話が苦手であることを考慮し、調査協力者へ答えたくないことは答えなくてよい事などをインタビュー中にも繰り返し伝えるなど、調査協力者への負担を減らす工夫を行った。

分析・結果の記述

インタビューの録音をそのままテキストベースの逐語録に起こした。その逐語録を研究協力者に提示しながら通話を行い、内容についての確認及び修正を行った。

倫理的配慮

インタビューは、研究趣旨を説明した後、インタビュー内容の録音及び学術目的での公開への同意をえた上で実施した。その際に、「インタビューはいつでも中断できること」「答えたくないことは答えなくてもいいこと」「データはいつでも削除できること」などを説明した。また、インタビュー後にインタビューの内容について、研究協力者自身によって、削除、訂正などを含めた内容チェックを行った。

結果と考察

○研究協力者の自己斉一性・連続性について

研究協力者の自己斉一性・連続性について以下のような語りが得られた。

注) 以下インタビューからの引用部分をゴシック体、インタビュアーの発言は①、研究協力者の発言は⊕で表す。また、引用に必要ないと判断した部分については(略)と置き換える。

①自分がないと感じることについて

- ① あなたは自分がないと感じることはありますか？
- ⊕ んー…そうですね、自分の意見を言うとき…ですかね
- ① あー、自分の意見を言うときに自分がないと感じるということですかね？
- ⊕ はい、なんか授業とか
- ① あー、なるほど…その意見…意見とかがってというのが、例えば他の人とかと話しているとき、今言った授業とか、友達とかと話しているときとかですか？
- ⊕ そうですね…他人の意見で自分の意見が一番近いものに乗かって、同調していく感じですね
- ① そうなんですねー…あーそうですね…結構

なんか他人の意見に合わせたりというのが多いという感じですかね？

- ⊕ はい
- ① なるほどー… (略) なんか自分でなんか意見作らないといけないなーとかは思ったりします？
- ⊕ んー…まっ、その方がいいんだろうとは思うけど、まっ苦手なので
- ① あーそうなんです…なるほどー…まっだから、基本その一、どちらかと言えば基本他人の意見で自分の意見に近いものに乗っかってるっていうのが多い感じなんですかね？
- ⊕ そうですね、多いですね
- ① (略) ちなみにほかの場面であったりしますか？
- ⊕ んー…そうですねー…自分がない…例えば物事の決断の時に結構…最初に他人に聞いてちょう
- ① 決断の時に最初に他人に聞いてちょう
- ⊕ なんか…なんか遊びに行くときとか、どこいくーとか…言われたらわしはどこでもいいーみたいな

②研究協力者の本当の自分について

- ① あなたの「本当の自分」というものについて感じたことを教えてください。
- ⊕ 本当の自分…
- ① はい、本当の自分… (略) 明確に「これが自分だー」と感じるものがあれば教えていただきたいんですけど
- ⊕ うーん…あー…まっ場面ごとに性格と違って色々…こう…色々変わったりするんで…
- ① あー…場面場面によって変わると…でその中で感じるのが自分であるということですか？
- ⊕ うーん…なんだろ…本当の自分…
- ① 本当の自分とか…これが本当の自分だーみたいな感じの部分って言ったらいいのかな？
- ⊕ うーん…これが自分だー、に近いのはやっぱり一番物事を考えているというか、問いかけ

けがしっかりしている誰にも表出させていない自分が本当の自分に近いんじゃないかなあ

① あー…なんでしょう…考え事をしているときの自分みたいな？

- ⊕ はい
- ① ほうほう…
- ⊕ おもてに…というかなんか人には出さない、あえて表出はさせないみたいな
- ① なるほどー…考え事をしている自分が本当の自分であると感じるんですね
- ⊕ はい、相手が自分しかいない状況で

自己斉一性・連続性についての考察

自己斉一性・連続性とは、自分は自分であるという一貫性と時間的な連続性の感覚の事である。研究協力者は、自分がないと感じる時はありますかという質問に対して「自分の意見を言うとき…ですかね」「他人の意見で自分の意見が一番近いものに乗っかって、同調していく感じですね」「例えば物事の決断の時に結構…最初に他人に聞いてちょう」などと答えた。また、「(本当の自分について感じたことについての質問) まっ場面ごとに性格と違って色々…こう…色々変わったりするんで…」と答えた。

このことから研究協力者は自分の意見を持っているものの、それを積極的に発言していこうとはせず、他者の意見に合わせていくことが多いという事が分かった。また、場面ごとに性格などが様々に変化している事が分かった。

次に研究協力者に本当の自分について質問したところ、「これが自分だー、に近いのはやっぱり一番物事を考えているというか、問いかけがしっかりしている誰にも表出させていない自分が本当の自分に近いんじゃないかなあ」と答えた。つまり研究協力者が本当の自分は考え事をしているときの自分であると感じていることが分かった。

しかし、自分の意見を持っていても他者の意見に合わせてしまうことや、場面ごとに性格が変化していることから、研究協力者は本当の自分が出せていないと考えており、日常生活など

では他者に合わせて変化する自分で対処していると感じているのではないかと考えられる。

そのため、一貫した本当の自分である考え事をしているときの自分が発揮できず場面ごとで変化する自分ばかりが使われ、その結果「自分がない」といった感覚に繋がりと、自己斉一性・連続性が低くなっているのではないかと考える。

○研究協力者の対他的同一性について

対他的同一性については以下の語りがみられた。

③他者に「本当の私」を理解してもらいたい

- ① 自分の周りの人々は「本当の私」をわかってきていないと感じることはありますか？
- ⊕ うーん…まぁ別にわかってもらおうという気もないので
- ① ふむふむそうなんですか
- ⊕ わかってきてるはずはないだろう、って感じですね
- ① あー、わかってもらおうとも思わないと…
- ⊕ はい
- ① だから、わかってるはずもないだろうという感じですね
- ⊕ はい
- ① ふむふむ…他者に何かわかってもらいたいとか感じることはありますか？
- ⊕ うーん…ないですねー
- ① ふむふむ、別にわかってもらわなくてもいいという感じなんですねー
- ⊕ はい、現状が現状でいいかな

④人前での自分について

- ① 人前での自分は本当の自分ではないような気がする、これはどう思いますか？なんかあてはまるなーとかあてはまらないなーとかっていうのはありますか？

- ⊕ まぁ…うーん…本当の自分が…本当の自分に一番近いものは、まぁ一人の時の自分…何かしら考え事をしている時の自分…まぁそうかな
- ① あー、考え事をしている時の自分がやっぱり、その「本当の自分」なんじゃないかと感じるから、って考えるとやっぱり、あの一あれじゃないかなーっていう…あの一…
- ⊕ 人前に出ているのは…
- ① …本当の自分ではないという気がする…ということなんですな…
- ⊕ です

研究協力者の対他的同一性についての考察

対他的同一性とは、他者からみられている自分自身が本来の自分自身と一致している感覚の事である。研究協力者は本当の私をわかってくれないと感じることはありますかという質問に対して「(本当の自分について) うーん…まぁ別にわかってもらおうという気もないので」「(本当の自分について) わかってきてるはずはないだろう、って感じですね」と答えた。

つまり、研究協力者は本当の自分をわかってもらおうと思っはおらず、また、前述したように研究協力者の本当の自分とは一人で考え事をしているときの自分であり、他者との関りで出ている自分は本当の自分ではないと考えていることが分かった。

このことから、研究協力者は他者から普段見えている自分、つまり他者との関りで表れている自分は本当の自分ではないと考えており、そのことを自覚しながらも「本当の自分をわかってもらえなくていい」と考えており、「自分が表出していないのだから他者もわかってくれないだろう」といった感覚に繋がりと、対他的同一性が低くなっていると考えられる。

今後の課題と展望

本研究は、先行研究で判明しているふれあい恐怖心性者の自己斉一性・連続性及び対他的同

一性が低い要因について、検討することを目的とした。その結果、研究協力者は自己斉一性・連続性及び対他的同一性について、様々な特徴があることが示唆された。

それらを踏まえ、ふれあい恐怖心性者の支援を検討する。まず考えられるものとして、ふれあい恐怖心性者の周辺環境に対する支援である。ふれあい恐怖心性者がもつ、他者との情緒的な関わりが苦手であることから、職場や学校などで、一人でも過ごしやすい環境を作ること、ふれあい恐怖心性者の QOL は向上すると考えられる。

次に、ふれあい恐怖心性者の自己斉一性・連続性及び対他的同一性が低くなる要因として本研究であげられた、他者に本当の自分を出表することを避ける傾向への支援が考えられる。他者に本当の自分を出表することができるようになれば、自我同一性の連続性が上昇し、他者と本当の自分とのズレも少なくなることが考えられる。そのため、他者との率直な語り合いをすることができるエンカウンターグループなどに参加し、他者に本当の自分を安心して話す事の出来た経験を積み重ねることで、本当の自分を様々な他者との関りの場面においても出表することができるようになるのではないかと考える。

本研究は、本来は内情を語る事を苦手とするふれあい恐怖心性を持つ研究協力者に、半構造化面接を用いてその内情を検討することができ

た点で意義があった。今後の課題としては研究協力者の人数を増やすことで、ふれあい恐怖心性者の様々な特性とその様相に迫ってきたい。

付記

本論文は東亜大学人間科学部心理臨床・子ども学科令和2年度卒業論文の一部を加筆修正したものである。また、論文執筆の際には村山正治教授及び村山ゼミの皆様は論文執筆におけるアドバイスや心構えなどについてご指導・ご支援いただきました。その際に行われた刺激的な議論も将来の糧となるものばかりでした。改めてお礼を申し上げます。

最後に、研究に協力していただいた研究協力者のA氏にも重ねてお礼申し上げます。

引用文献

- 伊藤 亮・村瀬 聡美・吉住 隆弘・村上 隆 (2008). 現代青年における“ふれあい恐怖的心性”と抑うつおよび自我同一性との関連 パーソナリティ研究, 16, 396-405.
- 岡田 努 (1993). 現代青年における友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 (2002). 現代大学生の「ふれあい恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10, 69-84.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, 49, 265-273.

A one case study of ego identity states of the person who has commu-phobic tendency.

Takumi Kuroki* • Tomoko Kitada**

Abstract

In this report, I investigated some ego identity instability that is characteristic of people with “commu-phobic tendency”. I conducted a semi-structured interview with one person online.

As a result of the survey, it was found that research collaborator change their opinions and personalities depending on the situation in their daily lives. Therefore “Self-Sameness, Continuity” decreased because the research collaborator felt “I don’t have myself”.

Another thing that I found research collaborator thinks “I don’t think people need to understand about my true self”, therefore research collaborator does not show his true self in relation to others. For this reason, research collaborator feel “I don’t show true self, so others don’t know my true self”. Consequently, “Interpersonal Identity” of research collaborator decreased.

Key words : commu-phobic tendency, ego identity, one case study

* Graduate School of Integrated Science and Art, University of East Asia

** School of Human Sciences, University of East Asia